

アブラ運動の形成時期に関する一考察

小 倉 英 敬

1. はじめに

世界資本主義システムが中枢部から周辺部に浸透する過程で、多くの途上地域の国々においては前資本制的な大土地所有制が拡大し、大土地所有者層が商業資本家層と連携して国内に寡頭支配制を形成して産業資本家層の成長を抑圧した結果、途上地域の多くの国々では寡頭支配層の政治的支配が20世紀半ば以降まで継続し、産業資本主義の形成が遅れた。このような国々では、1930年代以降に寡頭制を打倒するために産業資本家層や新中間層が中心となってポピュリズム運動が形成された。本稿では、ポピュリズム運動とは、①1930～70年代に途上地域の諸国に登場し、②産業資本家、新中間層、労働者、農民を基盤とした階級同盟を基盤として民族主義的傾向を強く有する、③カリスマ性のある指導者が登場した時に運動が拡大して政権を掌握したこともあり、④経済発展モデルとしては輸入代替工業化路線を採用した、という4つの共通点を有する政治的・社会的な運動であると定義する。

ラテンアメリカにおいても、1930～70年代に多くの国々においてポピュリズム型の政権が登場した。アブラ運動（アメリカ人民革命同盟

APRA: Alianza Popular Revolucionaria Americana) は、ラテンアメリカを代表するポピュリズム運動と分類される政治運動である。アブラ運動の歴史に関しては、これに属するペルーの一国党であるペルーアブラ党 (PAP: Partido Aprista Peruano) の正式な党史において3点の曖昧な点が存在する。それらの諸点とは、第1点はアブラ運動の結成時期、第2点は最大限綱領の作成時期、第3点は国際共産主義運動との決別時期に関してである。即ち、PAPは、その後に右傾化して反共姿勢を強化したために、アブラ運動は当初から国際的な共産主義運動とは路線を異にする運動であったと主張するため、結成時期、最大限綱領の作成時期、および国際協主義運動との決別時期に関して歴史的事実を曖昧化する必要があったと思われる。

アブラ運動の結成時期、最大限綱領の策定時期、および国際共産主義運動との決別時期とはいつであったのか。本稿はこれらの3点を明らかにすることを目的とする。

2. 1920年代におけるアヤ・デ・ラ・トーレの政治的軌跡

アブラ運動およびPAPはいずれもビクトル・ラウル・アヤ・デ・ラ・トーレ (1895～1979) を創立者とする。アヤ・デ・ラ・トーレは、1895年2月22日にラ・リベルタ県トルヒヨ市に植民地時代の名家の子孫である大土地所有者の家庭に生まれた。両親はエドムンド・ラウル・アヤ・イ・カルデナスとソイラ・ビクトリア・デ・ラ・トーレ・イ・カルデナスで、二人は母方の従兄妹であった。ビクトル・ラウルは彼らの5人兄妹の長男 (次弟はアグスティン、妹のソイラとルシア、三弟のエドムンド) として生まれた。デ・ラ・トーレ家は、フランシスコ・ピサロのインカ征服の際に従軍した「ガヨ島の13人」の一人の子孫である

とされる。

アヤ・デ・ラ・トーレは、1913年にトルヒヨ市の国立ラ・リベルタ大学文学部に入学し、同級生には後に国民的な詩人となるセサル・パジエホ（1892～1938）のほか、後にペルー・アブラ党（PAP）の幹部となるアンテノル・オレゴ（1892～1960）、カルロス・マヌエル・コックス・ロオセ（1902～1986）、マヌエル・バスケス・ディアス（1902～没年不詳）、アルシデス・スペルシン（1895～1976）らがいた。

その後、1917年に首都リマの国立サンマルコス大学法学部に進学したが、同年4月26日、アヤ・デ・ラ・トーレは師と仰ぐ当時国立図書館の館長であった思想家マヌエル・ゴンサレス・ブラダを訪問して懇談している。また、同年8月には遠戚のセサル・ゴンサレスがクスコ県知事として赴任する際に秘書として同行し、1918年4月末にリマに戻るまで山岳部南部の各地を訪問した。

アヤ・デ・ラ・トーレのリマ帰還の直後にアルゼンチンのブエノス・アイレスで労働者ストが発生し、さらに同年6～7月にコルドバ大学において大学改革運動が発生した。このコルドバ大学の大学改革運動は多くのラテンアメリカ諸国に影響を与えたが、リマの国立サンマルコス大学にも影響した。

アヤ・デ・ラ・トーレはこの大学改革運動の中で頭角を現した。1919年5月27日に8時間労働制を求める労働者のゼネストが発生し、治安当局の介入で400名以上の死傷者を出すに至ったが、アヤ・デ・ラ・トーレは労働者と連帯する運動を指揮した。同年10月にはペルー学生連盟議長に選出され、こうしてアヤ・デ・ラ・トーレはロシア革命の影響によって勢い付けられた勃興期の労働運動と連携して労学連携運動の中心となっていった。サンマルコス大学時代には、マヌエル・セオアナ・コラレス（1900～1963）、ホルヘ・ギジェルモ・レギア、ホルヘ・バサ

ドレ、ルイス・アルベルト・サンチェス（1900～1994）と親交を深めた
が、セオアネとサンチェスは後に PAP の幹部となる。

1919 年 7 月 4 日に発生したクーデターを経て 9 月 24 日にアウグス
ト・B. レギア（1863～1932）政権が発足した際、母方の叔父であるグ
スタボ・デ・ラ・トーレがレギア政権の副大統領であったこと、また遠
戚のアグスティン・ガノサがレギアの選挙委員会委員長であったなど、
親戚の中にレギア派が多かったこともあり、アヤ・デ・ラ・トーレもレ
ギア政権発足に協力した。しかし、その後レギア政権の保守化に伴って
アヤ・デ・ラ・トーレが指導する急進的な労学連携運動とレギア政権の
関係が決裂するに至り、アヤ・デ・ラ・トーレは反レギア姿勢を強めて
いった。

1921 年 1 月 22 日にはリマにおいてペルー学生連盟の指導下に労学連
携を具体化するゴンサレス・プラダ人民大学が設立されたが、アヤ・
デ・ラ・トーレは人民大学学長に就任し、名実ともに労学連携の要の役
割を果たした。また同年 6 月にはゴンサレス・プラダ人民大学の機関紙
的役割をもつ『クラリダ Claridad』誌を発行して急進的前衛世代であ
る「新しい世代」による情宣活動の中心とした。

アヤ・デ・ラ・トーレの政治的姿勢が急進化する一方で、レギア政権
は 1923 年 5 月 23 日に保守主流派への妥協を図ることを目的としてペ
ルーを「キリストの心に捧げる」式典を挙行了。これに対して、この行
事は憲法が規定する政教分離に反すると反発した労学連携運動が抗議行
動を起こして死亡者 2 名を出す街頭騒擾事件に発展した。その際レギア
政権は、ゴンサレス・プラダ人民大学学長であったアヤ・デ・ラ・トー
レを首謀者として指名手配した。アヤ・デ・ラ・トーレは逮捕され、収
監された後に釈放されたものの、10 月上旬に再逮捕され国外追放処分
に付された。

アヤ・デ・ラ・トーレは、1923年10月9日に追放地となったパナマ（アルベルト・ルイス・ロドリゲス・パナマ学生連盟議長が出迎え）、およびキューバ滞在を経て（10月31日着、11月3日にはホセ・マルティ人民大学設立式に出席）、11月16日に当時メキシコの公共教育相であったホセ・バスコンセロス・カルデロン（1882～1959）の招きによってメキシコに到着した。メキシコではバスコンセロスから文化普及・農村教育振興計画の作成プロジェクトへの参加を求められた。

アヤ・デ・ラ・トーレは、メキシコで1924年4月10日に举行されたエミリアーノ・サパタ追悼集会に出席し、メキシコ革命を「モデルを持たない20世紀最初の社会運動である」と称揚するなどメキシコ革命との一体感を示した。また、同年5月7日にはレロ・デ・ラレア・メキシコ学生連盟に対して「新しい世代」の精神を表現する「インドアメリカ」（アブラ運動が用いた先住民系を含めた米州を表現する用語）を象徴する旗をペルー学生連盟議長として手渡す儀式をとり行った。PAPの正史においては、この儀式をアブラ運動の結成として写真入りで紹介されることが多い¹⁾。しかし、この儀式はアヤ・デ・ラ・トーレの個人的な友人であるメキシコ人学生のホセ・アンヘル・セニセロスが準備した「インドアメリカ」の旗が「新しい世代」の連帯を象徴する儀式としてアヤ・デ・ラ・トーレからメキシコ学生連盟に手渡されたにすぎず、具体的な思想的内容を持つ運動が結成されたことを意味するものではない。この儀式に関して、サンチェスは「事実上アブラが設立された」と表現しているが [Sánchez 1980: 180]、アブラ運動の「構想」が芽生え始めた時期であるとするのが適切な解釈であろう。この儀式が象徴したものとは、メキシコ革命、そしてペルー、キューバ等で開始された人民大学運動に代表されるラテンアメリカ全体に共通して発生しつつあった急進的前衛世代である「新しい世代」の意識であったといえよう。

1924年5月、アヤ・デ・ラ・トーレはメキシコを出国し、6月に米国で組織されたキリスト教系・無党派系学生のス連訪問団の一員に加わり、リマ地方労働者連盟（FLOL）のリカルド・カセレス書記長で発行した信任状を携行して訪ソした（メキシコは同年8月4日にソ連を承認）。FLOLからは「ペルーの前衛の代表としてソ連の実情を調査し報告すること」が任務として課せられた。また、メキシコの雑誌『絵入りユニベルサル』から10年間の特派員契約も取得した。アヤ・デ・ラ・トーレ一行がソ連に到着した時、コミンテルン（共産主義インターナショナル）の第5回大会が開催されており、アヤ・デ・ラ・トーレたちはオブザーバーとして出席した。また、7月15日に開催された青年共産主義者世界会議にも出席した。訪ソ中、アヤ・デ・ラ・トーレは肺結核の初期症状を呈したため、同年9月にソ連教育人民委員であるアナトリー・ルナチャルスキー（1875～1933）からロマン・ロラン宛の紹介状を取得してスイスに向けて出国した。

9月27日、アヤ・デ・ラ・トーレはレニングラードを発してスイスに向かった。アヤ・デ・ラ・トーレは1928年4月に執筆した（出版は1936年）『反帝国主義とアブラ』の中で、「モスクワにおいて私が得た第一印象は、ロシアにおいて見られたインドアメリカに関してもたれていたほぼ完全な無知であった」と記し、ソ連に関して否定的な印象を述べている。しかし、この著作はアヤ・デ・ラ・トーレが国際共産主義運動と決裂した後の時期に出版されている事実を考慮すべきであろう。逆に、アヤ・デ・ラ・トーレと1925年1月にイタリアのジェノバで会見したバルミロ・マキヤベロ在ジェノバ・ペルー総領事とセサル・ファルコンは、アヤ・デ・ラ・トーレが熱烈なソ連礼賛とマルクス主義賛美を行っていたと証言している。この点にも、アブラ運動による歴史的事実の捏造が見られる。即ち、国際共産主義運動と決別したアブラ運動は、

アヤ・デ・ラ・トーレが訪ソ時からソ連や国際共産主義運動に失望していたとの、歴史的事実の修正を行ったと考えられる。

アヤ・デ・ラ・トーレがスイス滞在中にベルーで発生したサムエル・デ・アルカサル大佐のよる武装蜂起未遂事件に関連して、レギア政権がアヤ・デ・ラ・トーレがこの未遂に連座したとしてスイス検察庁に身柄拘束を依頼し、同国官憲が旅券等の携行品の押収を行うなどの弾圧を行った。このため、1925年1月にアヤ・デ・ラ・トーレはイタリアに脱出し、ミラノ、ベネチア、ナポリを歴訪した後、2月22日にパリに到着、その後ロンドンにわたってロンドン・スクール・オブ・エコノミクスに入学した。

アヤ・デ・ラ・トーレのロンドン滞在中に、アブラ運動の実質的な形成に向けて重要な出来事が発生した。同年6月に米国がメキシコに対する内政干渉を行おうとする事件が発生したため、6月29日にパリにおいてラテンアメリカ出身の知識人やスペイン人知識人の緊急抗議集会が催され、アヤ・デ・ラ・トーレもロンドンから駆けつけて集会に出席した。この集会は「反帝国主義」を訴える集会になったが²⁾、集会にはスペインのミゲル・ウナムノ（1864～1936）、ホセ・オルテガ・イ・ガセット（1883～1955）、メキシコのバスコンセロス、グアテマラのミゲル・アンヘル・アストゥリアス（1899～1974）、ウルグアイのカルロス・キハーノ（1900～1984）、アルゼンチンのマヌエル・ウガルテ（1875～1951）等が参加して発言した。この集会が、アヤ・デ・ラ・トーレが「反帝国主義」を掲げる統一戦線的な運動としてのアブラ運動を結成する上で重要な出来事となったものと思われる。アヤ・デ・ラ・トーレはこの集会において「ラテンアメリカの新しい反帝国主義世代の代表」の名において、「我々の戦いは内外の敵に対して行われねばならない。帝国主義の重要な計画の一つは我々を分断することである。統一し、

連邦化したラテンアメリカは、世界で最も強力な連邦の一つを形成し、ヤンキー帝国主義にとって脅威とみなされるだろう。(中略) 自由を求めて戦うラテンアメリカ諸人民の唯一の道は、内外の敵に対して団結することである」と発言した [Haya de la Torre 1977a: 76-79]。この時点で、アヤ・デ・ラ・トーレにはアブラ運動の思想的基盤が形成されていたと見ることができよう。

3. アブラ最大限綱領とパリ支部の結成

1927年1月22日、ニカラグアのサンディエーノによって行われていた反帝国主義闘争に連帯する目的で、アヤ・デ・ラ・トーレはパリに居住するペルー人留学生たちとともに最初のアブラ運動の具体的実態となったアブラ・パリ支部の会合に参加した。集会に参加したのは、フェリペ・コシオ・デル・ポマル (1889~1981)、セサル・バジェホ (1892~1938)、エウドシオ・ラビネス (1897~1971、後のペルー共産党書記長) 等の他、ルイス・エドゥアルド・エンリケス、レバサ、(エドガルドとウィルフレッドの) ロサス・レカロス兄弟、(ラファエルとアルフォンソの) ゴンサレス・ウィリス兄弟、ヘラルド・ロアイサ、ゴンサロ・ガマラ・カジェル等のクスコ出身者であった。

その後、アブラ支部がペルー国内のクスコやリマの他、ブエノス・アイレス、メキシコ、ラ・パス、キューバの各地に設立されたが、メンバーの大半はペルー人亡命者や留学生たちであった。サンチェスは、この日の集会は1926年前半に既に結成されていたアブラ・パリ支部に「アブラ反帝国主義研究センター」を設立することが目的であり、集会にはペルー人の他、中国国民党の代表 (Sia Tin 中華民国国連代表)、ハイチ、ニカラグア、ドミニカ共和国の代表が参加したと主張している

[Sánchez 1980: 155]。この集会のアブラ運動史上における意味合いがアブラ運動の形成時期に関する考察において重要となる。

PAPの正統派を代表するサンチェスは、1954年に出版した『アヤ・デ・ラ・トーレとアブラ』において、「1925年末あるいは1926年1月にアブラ・パリ支部の最初の夕食会が催された」と述べている[Sánchez 1980: 15]。しかし、他のアブラ関係者の文献にはこのような記述は見られない。また、サンチェス自身が、1934年に出版した『アヤ・デ・ラ・トーレまたは一政治家』において、「1926年末にアヤ・デ・ラ・トーレはパリに戻りアブラ委員会を設立した」と記しており[Sánchez 1979: 134]、サンチェスの両著書には明らかに矛盾が存在する。

他方、アヤ・デ・ラ・トーレが1926年4月15日に、後にアブラ・メキシコ支部書記長となるエステバン・パブレティッチに宛てた書簡の中で「我々が形成すべき反帝国主義統一戦線は、いかなる既存の派閥に奉仕するものではなく、ラテンアメリカの労働者階級に奉仕するものである」と述べた上で、「私はアブラの組織化に向けて努力している」、[Planas 1986: 140-141]と述べている。従って、少なくとも1926年4月時点ではアブラ運動は結成されていなかったことは確実であり、また「アブラ」という言葉が見られるのは、筆者の現在までの調査に拠れば、この書簡が最初である。さらに、1926年中にドミニカ共和国のフリオ・コエジョに宛てた書簡の中で、ラテンアメリカにおける反帝国主義運動の形成に関して述べた部分において、反帝同盟について述べた上で、「戦いの重大さ、明白にラテンアメリカで、刷新的あるいは革命的で、効果的な性格を与える必要性がより広汎で完璧な組織の形成を求めている。すでにそれは組織されつつある。それは“ラテンアメリカの肉体的・知的労働者の統一戦線であるアブラである」と記している。問題は

この書簡が発出された時期について、『アヤ・デ・ラ・トーレ著作集第1巻』には詳細な説明はなされていない点にある。パブレティッチ宛て書簡に見られた「組織化に向けて努力している」との表現、コエジョ宛ての書簡に見られた「組織されつつある」との表現は、アブラが既に結成されたことを意味するのではなく、組織化に向かっていると解釈すべき表現である。

また、アブラ・パリ支部の結成に参加したコシオ・デル・ポマルは、1961年に出版した『ビクトル・ラウル』において、「カルティエ・ラタンのレストランで行われた夕食会で最初のアブラ支部の設立が举行された」と述べているが、この夕食会の実施時期については明記していない[Cossio del Pomar 1962: 268]。他方、アヤ・デ・ラ・トーレは、「11月2日にアブラのヨーロッパにおける活動を指導する最初のペルー人青年たちのグループが結成されたばかりのパリから帰った時、『アマウタ』の第1号を見つけた」と述べていること[Haya de la Torre 1997a: 115-116]、ラビネスが1926年10月末にプエノス・アイレスからパリに到着し、パリ支部の結成に参加していることから、パリ支部の結成は1926年10月末から11月2日までの間の時期であったことは確実である。

次に、アブラ運動の思想的・綱領的内容に関してアヤ・デ・ラ・トーレは、1928年4～5月に執筆した『反帝国主義とアブラ』の中で、1924年12月にアブラの綱領が策定されたと述べているが、そのような綱領は1926年11月に発行されたイギリスの『ザ・レイバー・マンスリー The Labour Monthly』にアヤ・デ・ラ・トーレが掲載した「最大限綱領」以前には見当たらない。同誌に掲載した論稿「アブラとは何か」の中でアヤ・デ・ラ・トーレは次の5点を「最大限綱領」として掲げた。

(イ) ヤンキー帝国主義に対する反対。

- (ロ) ラテンアメリカの政治的統一。
- (ハ) 土地と産業の国有化（民族化）。
- (ニ) パナマ運河の国際化。
- (ホ) 全世界の被抑圧人民・被抑圧階級との連帯。

この綱領が策定されたのは、1926年10～11月頃であったと見られるが、アヤ・デ・ラ・トーレは、『反帝国主義とアブラ』の中で、アブラは1927年2月にブリュッセルで開催された反帝国主義国際会議においてその姿勢を決定し、「外国からの干渉も影響も受けないラテンアメリカ独自の運動である」と表明したと記している。従って、アブラが明確な姿勢を表明できるようになったのは、1927年2月であったとすれば、綱領が策定されたのはその直前であったと判断すべきであろう。

上記のような関係者や研究者の表明を考慮すれば、構想はともかくとして、内容面および組織面でのアブラ運動の結成時期は、アヤ・デ・ラ・トーレは『反帝国主義とアブラ』の中においては、「アブラは綱領の総論的5項目が策定された1924年12月に結成された」[Haya de la Torre 1977b: 74]と述べている一方で、1926年12月に発行された『アマウタ』第4号に掲載されたホセ・カルロス・マリアテギ宛ての書簡において、「ヨーロッパにおけるアブラの活動を指導する若いペルー人の第一のグループが結成されたばかりのバリから1926年11月2日に（ロンドンに）戻った」と記していることを考慮すれば³⁾、前述の通り、1926年10月末から11月2日までの間であったと判断される。

4. 国際共産主義運動との決別

1927年2月10日から23日までブリュッセルで開催された反帝国主義国際会議は、コミンテルンの指導下で1924年に組織された反帝国主

義同盟が主催した国際会議であり、孫慶齡（1893～1981、孫文未亡人）、マクシモ・ゴリキー（1968～1936）、アンリ・バルビュス（1973～1935）、片山潜（1859～1933）、ジェームズ・マクストン（1985～1946）、ジョージ・ランズベリー（1859～1940）、ロマン・ロラン（1866～1944）、レオン・ブルム（1872～1950）、バスコンセロス、ウガルテ、キハーノ、アントニオ・メージャ（1903～1929）、ビットリオ・コドビージャ（1984～1970）等が参加した。ペルー人としては当初、アルゼンチンの反帝同盟の委任状を取得したラビネスだけが招待されており、アヤ・デ・ラ・トーレもアブラ運動も招待されていなかった。このため、1926年末にブエノス・アイレスから渡欧して、反帝国主義国際会議にはブエノス・アイレスの反帝同盟の代表として参加したラビネスが奔走してアヤ・デ・ラ・トーレも招待されることになり、会議では演説も行った。アヤ・デ・ラ・トーレは『反帝国主義とアブラ』において、「アブラは公式には招待されなかったが、個人的にはアプリスタたちは幾人かの著名なインドアメリカの知識人とともに特別に招待された」と述べている[Haya de la Torre 1977b: 86]。アヤ・デ・ラ・トーレは、当初は反帝同盟から招待されていなかったことに相当立腹し、プライドを傷つけられたようである。この会議においては、ラテンアメリカからの参加者の中で、アヤ・デ・ラ・トーレと、既にコミンテルンの影響下にあったメージャ、コドビージャ、キハーノらとの間に路線の対立が生じた。ラビネスがコミンテルン路線寄りの姿勢を採るようになるのは1929年の訪ソ後である。

アヤ・デ・ラ・トーレが、このブリュッセル反帝国主義国際会議から得た失望は、反帝同盟は帝国主義に対する抵抗運動において重要性をもつべきものとされつつも、政治的指導は各国共産党に委ねられるべきとの方向性が示されたことに発し、換言すれば、ラテンアメリカにおける

アブラ運動の政治的重要性が無視された点にあったと見られる。ここからアブラ運動がアヤ・デ・ラ・トーレの指導下に国際共産主義運動とは異なる路線を採り始めることになる。アヤ・デ・ラ・トーレは『反帝国主義とアブラ』の中で、「国際共産主義運動にとってはスターリン正統派の第3インターナショナルの公式党以外に左翼党は存在しえない。1927年のブリュッセル会議後、それはアブラであった」と記し、ブリュッセルの反帝国主義国際会議が国際共産主義運動とアブラ運動と間の分岐点となったと述べている〔Haya de la Torre 前掲書：87〕。

アヤ・デ・ラ・トーレはブリュッセルの反帝国主義国際会議出席の後、ロンドンに戻ったが、同年8月1日にロンドンを離れ、パリを經由して、9月中旬にニューヨークに到着した。ニューヨークで複数回の公演を行った後、11月16日に米国を発してメキシコに着いた。メキシコではバスコンセロスの尽力で公共教育省の古典作品出版部門に職を得た。その一方で、先にヨーロッパから帰着していたキューバ人共産主義者のメージャやメキシコ共産党がアヤ・デ・ラ・トーレとアブラ運動に対する批判を展開したため、アヤ・デ・ラ・トーレはメキシコ・シティおよびその周辺で講演活動を行う一方で、1928年4月に発行されたメージャが執筆したパンフレット『アルパとは何か?』に対する反論として、同年4～5月に『反帝国主義とアブラ』を執筆した。メージャは、「アブラは日和見主義とラテンアメリカ改良主義の組織的意図を代表する」とアブラを批判していた。

アヤ・デ・ラ・トーレのメキシコ滞在中の1927年末にペルー人学生のパブレティッチを書記長としてアブラ・メキシコ支部が結成されている。1928年1月22日には、アブラ・メキシコ支部によって「メキシコ計画」が策定された。「メキシコ計画」は15項目から成り、アヤ・デ・ラ・トーレのペルー帰国を目指して、アブラのペルー一国民党である「民

族主義解放党 Partido Nacionalista Libertador」およびその軍事組織である「民族主義解放軍 Ejercito Nacionalista Libertador」の結成を図ろうとするものであった。具体的には、ENLが北部のタララに上陸して軍事行動を開始するとともに、1929年3月に想定されていた大統領選挙にアヤ・デ・ラ・トーレを立候補させてレギア政権打倒を図ろうとする計画であった。署名者は、カルロス・マヌエル・コックス、マグダ・ポスタル、バスケス・ディアス、パブレティッチ、デラフィン・デル・マル、ニコラス・テレロス、ハコボ・ウルヴィッツ等であった。この「メキシコ計画」が、ペルー国内のアブラ運動を分裂させ、マリアテギらの社会主義者グループとの決別をもたらすものとなる。

その後、アヤ・デ・ラ・トーレはニカラグアのアウグスト・サンディエーノ（1895～1934）の指導下で展開されていた反帝国主義闘争を支援するために中米諸国を訪問することや、ペルーでの大統領選挙への出馬を射程に入れたペルー帰国を準備し始めた。同年6月、アヤデ・ラ・トーレはメキシコを発してグアテマラに入国した。8月22日には同国官憲によって身柄を拘束されてエル・サルバドルに出国させられ、エル・サルバドルでは、同国陸軍の教官をしており、後にペルー帰国計画である「メキシコ計画」において「民族解放軍」司令官になる予定であった旧友のフェリペ・イパラギーレと「メキシコ計画」やサンディエーノ支援について議論している。しかし、9月11日に同国治安部隊が身柄拘束を図ろうとしたため、アヤ・デ・ラ・トーレはコスタリカに脱出し、12月12日まで同国に滞在した。11月12日にはアブラのコスタリカ支部が、以前からアヤデ・ラ・トーレと親交のあった『レボルトリオ・アメリカノ Repertorio Americano』編集長であるホアキン・ガルシア・モンヘを中心として結成されている。

12月12日にアヤ・デ・ラ・トーレはコスタリカを出国しパナマに向

かったが、ブルボア港でパナマの官憲がアヤ・デ・ラ・トーレの上陸を許可しないばかりか、乗船していたハンブルグ・アメリカ・ラインの「フェニシア」号をバルボアには停泊させず、次の停泊地であるブルーメンに向かうことを強要した。こうして、アヤ・デ・ラ・トーレは強制的にアメリカ大陸からヨーロッパに身柄を移送されることになり、12月下旬にベルリンに到着した。アヤ・デ・ラ・トーレに対する強制移送には米国政府とパナマ政府が関与していたとされる。

このようにアヤ・デ・ラ・トーレは、ブリュッセルの反帝国主義国際会議を契機として国際共産主義運動と決別してラテンアメリカ独自の変革運動を具体的に展開した矢先に、米国政府等の介入によって活動を中断され、ペルー帰国計画の一時延期を強いられることになった。この間、コミンテルン側からは何度も慰留の働きかけが行われている。その窓口になったのは、1924年にアヤ・デ・ラ・トーレが訪ソした際に知り合ったアブラモビッチ・ロゾフスキー（1872～1952）であった。プロフィンテルン（赤色労働組合インターナショナル）議長であったロゾフスキーは、1926年11月頃（『ザ・レーバー・マンスリー』に論稿「アブラとは何か」が掲載された後）にアヤ・デ・ラ・トーレ宛てに書簡を送り、アヤ・デ・ラ・トーレに拠れば、「新しい組織（筆者注：アブラ運動を指すと思われる）を歓迎する」と述べた上で、「インドアメリカの諸人民が持てる反帝国主義的な同盟者はブルジョア的もしくは小ブルジョア的な知識人ではなく、労働者以外にはありえない」との趣旨を記述した「曖昧な」内容のものであったが、アヤ・デ・ラ・トーレを国際共産主義運動の中にとどめ置こうとする意図を感じさせるものであった[Haya de la Torre 1976b: 84]。これに対してアヤ・デ・ラ・トーレは返信を認め、ラテンアメリカの社会的・経済的・政治的現実ヨーロッパとは異なることを説明し、「ヨーロッパからこれらの諸問題の魔術的

処方箋を与えることは不可能であると主張した」と述べている〔前掲書85〕。アヤ・デ・ラ・トーレの反論の要点は、ラテンアメリカは資本主義システムの初期的な段階にあるために、ヨーロッパからの「魔術的処方箋」であるプロレタリア前衛党である共産党の指導性は適切ではなく、中間層の役割をも重視した統一戦線的なアブラ運動を基盤とする党の指導下で変革を目指すことが適切な路線であるという点にあった。それ故に、コミンテルンの指導性を否定した。

アヤ・デ・ラ・トーレに拠れば、ロゾフスキーとの書簡の交換は数回に及んだらしい。そしてロゾフスキーとの往復書簡の一部が1928年3月にモスクワで開催されたプロフィンテルン第4回大会の席上で配布され、アヤ・デ・ラ・トーレとアブラの姿勢が批判された。これに対して、同大会にペルー代表として出席していたフリオ・ポルトカレーロがアヤ・デ・ラ・トーレを強く擁護する発言を行っている⁴⁾。

ロゾフスキーは、その後もアヤ・デ・ラ・トーレに対する説得を行おうとした。ポルトカレーロに拠れば、ロゾフスキーはプロフィンテルン第4回大会に出席したポルトカレーロに対して、もう一度アヤ・デ・ラ・トーレと直接に話す必要があるとして、ポルトカレーロがメキシコにいたアヤ・デ・ラ・トーレを連れて再度訪ソし、ペルー問題について話し合うことを提案した。ポルトカレーロは、ソ連を出国して1928年5月初め頃にパリに着き、事情をアブラ・パリ支部長であったラビネスに話した。その結果、ラビネスがメキシコにいたアヤ・デ・ラ・トーレに再度訪ソしてロゾフスキーと話すよう勧めた書簡を送り、ポルトカレーロも1ヶ月ほど待ったが、アヤ・デ・ラ・トーレからの返事は来なかった〔Portocarrero 1987: 150-155〕。この時期、アヤ・デ・ラ・トーレはグアテマラに向けて出国寸前であり、ラビネスからの書簡が手元に届いたかどうか不明である。また、この時期は、後述するように、マリア

テギがアヤ・デ・ラ・トーレを批判する書簡をメキシコ支部宛てに送り、アヤ・デ・ラ・トーレの返書がホセ・カルロス・マリアテギ（1894～1930）宛てに到着する直前の時期であった。アヤ・デ・ラ・トーレの国際共産主義運動とは決別するとの意思は固かったため、ロゾフスキーの説得に応じてアヤ・デ・ラ・トーレが再度訪ソする可能性はほぼなかったと推測される。

アヤ・デ・ラ・トーレのドイツ滞在中の1929年8月に、フランクフルトにおいて第2回反帝国主義国際会議が開催されているが、ペルー代表としては、ラビネスとウルヴィッツが参加しており、アヤ・デ・ラ・トーレおよびアブラには招待状は発出されなかった。

上記の事実を考慮するならば、アヤ・デ・ラ・トーレおよびアブラ運動が国際共産主義運動と決別したのは1927年2月からアヤ・デ・ラ・トーレがロンドンを離れた8月までの間であったと判断できよう。その後、1929年5月16日にラビネスを書記長とするアブラ・パリ支部は解散され、その直後にエンリケスを書記長とする新支部が結成されている。こうしてアブラ運動に参加しているペルー人亡命者の間にも、ラビネスやアルマンド・バサン等のコミンテルンとの関係を重視する社会主義者グループと、国際共産主義運動と決別したアヤ・デ・ラ・トーレ、エンリケス、コシオ・デル・ポマル等との間に決裂が生じることになる。

しかし、国際共産主義運動と決別したとはいえ、アヤ・デ・ラ・トーレはこの時期にマルクス主義的な理解や方法を放棄したとは言い難い事実が残されている。1976～77年に出版された『アヤ・デ・ラ・トーレ全集』や『反帝国主義とアブラ』をはじめとするPAP関係の出版物の中には採録されていないが、アヤ・デ・ラ・トーレが国際共産主義運動と決別してからもマルクス主義的な急進的な言葉遣いをしている例が多々存在する。

例えば、1926年4月15日にアヤ・デ・ラ・トーレが後にアブラ・メキシコ支部書記長になるパブレティッチに宛てた前出の書簡の中でアヤ・デ・ラ・トーレは、「問題は、我々の運動に実際に共産主義的な、マルクス・レーニン主義的な性格を与えることである」と述べている[Planas 1986: 140]。1926年4月の時点でマルクス・レーニン主義的な理論を放棄していないことが確認できる。次に、1929年にラ・パスのセサル・メンドサに宛てた書簡の中では、「アブラは共産主義の名前なしに維持されなければならないと考える。狡猾さを遠ざけて実効的に、革命的に活動しよう。名称や執着は何の意味もない。革命を準備しなければならず、これは唯一マルクス主義的なものである」と述べている。さらに、1929年9月末に、再設されたアブラ・パリ支部書記長となったエンリケスに宛てた書簡の中で、アヤ・デ・ラ・トーレは、「アブラはラテンアメリカにマルクス主義を合体させることに努めていると繰り返すことは私の義務である。アブラの綱領はマルクス主義であり、それを認識するマルクス主義者のすべてがそれを認識している。その戦術はマルクス主義的であり、その体制は本質的にマルクス主義的である」[Enríquez 1951: 39-40]と記している。

このような国際共産主義運動と決裂した後の1929年にも見られたアヤ・デ・ラ・トーレのマルクス主義の理論や方法を放棄していない表現をどのように解釈すべきであろうか。推定できることは、アヤ・デ・ラ・トーレはコミンテルンの指導下でアブラ運動が活動することは拒否したが、国際共産主義運動が使用していた理論や方法は1929年に時点においてはまだ放棄していなかったということを示すものであろう。

5. ペルー国内の社会主義者グループとの決別

このようなアヤ・デ・ラ・トーレとアブラ運動の国際共産主義運動からの決別は、アヤ・デ・ラ・トーレ等と、ペルー国内のマリアテギ等の社会主義者グループとの間の決裂をも生じさせることとなった。

リマにおいては、1923年10月のアヤ・デ・ラ・トーレの国外追放後、マリアテギが労学連携運動の指導を継承していた。マリアテギは、1894年6月に海岸部南部のモケグア県に生まれ、小学生時代からリマ市で成長した。名門マリアテギ家の私生児として生まれ、小学校時代に左脚に障害をもつようになったため、小学校を卒業できずに独学し十台の頃から『プレンサ』紙の配達で身を立て、その後才能を認められてジャーナリストとなり、1910年代には気鋭の著作家・評論家として反抗的な文学者たちと交流し、他方ジャーナリストとして労働運動に立脚して社会主義への傾斜を強めた。1919年4月に生じた8時間労働制を求める労働運動の指導者として頭角を現し、同年9月に登場したレギア政権と対立関係になったが、本家であるマリアテギ家がレギア大統領と親戚関係にあったことから（レギア大統領夫人の母方がマリアテギ家出身）、同大統領の勧めに応じて政府の情宣アタシェとしてヨーロッパに渡航する道を選んだ。

マリアテギは、1923年2月までのヨーロッパ滞在の大半をイタリアで過ごし、イタリア滞在中にベネデット・クローチェ（1866～1952）、ピエーロ・ゴベッティ（1901～1926）らと知り合ったほか、アントニオ・グラムシ（1891～1937）、アマデオ・ボルディガ、セラッティ、フィリッポ・トゥラーティなどのイタリア社会党、およびこれから分離したイタリア共産党の指導者たちと交流し、1921年12月頃にはジェノバ

でペルー人社会主義者グループを結成し、社会主義への傾斜を強めた。マリアテギがヨーロッパ滞在を通じて体得したマルクス主義は、ロシア・マルクス主義の影響以上に、グラムシ、ジェルジ・ルカーチ（1885～1971）、カール・コルシュ（1886～1961）らに代表される「主意主義」と歴史的解釈を特徴とする1920年代のヨーロッパ・マルクス主義の影響を強く受けたものであった。

1923年3月に帰国してからは、アヤ・デ・ラ・トーレらが結成した人民大学運動に協力し、同年10月のアヤ・デ・ラ・トーレの国外追放後は、人民大学を基軸とした労学連携運動に代表される急進的前衛世代の指導者となった。1926年9月には急進的前衛世代の雑誌『アマウタ』を創刊し、統一戦線の核を形成しながらも「分極と集中」を目的とした活動を開始した。1927年6月にはアヤ・デ・ラ・トーレのヨーロッパにおける活動を原因とするレギア政権による「共産主義者による政府打倒陰謀」を口実とした急進的前衛世代に対する弾圧の中で『アマウタ』紙は休刊に追い込まれるが、同年12月に再刊された際には、社会主義派の人々が執筆した論稿が増えるなど、「分極と集中」のプロセスを経て「社会主義の雑誌」との姿勢を明確にしていた。マリアテギは、1928年9月発行された『アマウタ』第7号から1929年6月に発行された第24号まで「マルクス主義の防衛」と題する論稿を連載したほか、種々の雑誌に掲載した論稿を通じて、その「主意主義」を特徴とするマルクス主義の思想を展開した〔小倉2002:108-121〕。

前述の通り、この時期にアヤ・デ・ラ・トーレはメキシコに帰着して、ペルーへの帰国を目指して「メキシコ計画」を推進中であった。マリアテギは、この「メキシコ計画」を1928年初頭に知ることになり、「メキシコ計画」に強く反対するマリアテギとアヤ・デ・ラ・トーレの関係は悪化し、両者の決裂に至る。同年4月16日付けでマリアテギはアブ

ラ・メキシコ支部宛てに書簡を送り、その中で「昨日までその準備のために互いに一致していた歴史的な偉業を引き受けることに失格して誕生したペルー民族主義党には決して加盟しないことを緊急に宣言する義務を感じる」と記し、アヤ・デ・ラ・トーレらが結成を目指したPNL（民族主義解放党）への加盟を拒否して、中間階層の指導下で結成される一国党はイタリア・ファッショ運動と同様のものになると批判し、アブラは一国党に改編されるべきではなく統一戦線としてとどまるべきであるとの見解を示した。

これに対してアヤ・デ・ラ・トーレは5月20日付けで返信を送り、「あなたが我々に反対していることを知っている。私は驚かない。しかし革命は我々が、土地を分配しつつ、帝国主義と闘いながら、社会主義に言及することなく行う」と喧嘩腰で述べ、アブラをイタリアのファッショ運動と同一視するのは「ヨーロッパかぶれ」の主張である反論した。

こうして、アヤ・デ・ラ・トーレを決別したマリアテギは、1928年9月16日にペルー社会党（PSP: Partido Socialista Peruano）の結成を決定し、PSPは10月7日に正式に結成された。PSPは、労働者と農民を基盤とする大衆党であると規定され、PSPの綱領は次の9項目の諸原則に基づくものであると宣言された。

- ①現代経済の国際的性格。
- ②プロレタリア革命運動の国際的秩序。
- ③資本主義経済の矛盾の高まり。
- ④資本主義は帝国主義段階にある。
- ⑤ペルーの前資本主義的経済は、帝国主義的利害に従属し、大土地所有・教会封建勢力と結託しているブルジョア経済の下では、植民地封建制の障壁と残滓から自らを解放できない。
- ⑥先住民共同体の残存の中に農業問題の社会主義的解決の要素が見出さ

れる。

- ⑦社会主義だけが民主的で平等主義的な教育の問題を解決しうる。
- ⑧ブルジョア民主主義段階を経た後、革命はプロレタリア革命に転化する。プロレタリア等が社会主義秩序の組織化と防衛の任務を果たす。
- ⑨PSPはプロレタリアートの前衛であり、階級の理想実現のための闘いで指導的任務を担う政治勢力である。

PSPは、「この時期におけるマルクス主義的社会主義の実践は、マルクス・レーニン主義である。マルクス・レーニン主義は帝国主義・独占段階の革命方式である。PSPは闘争方法としてこれを採用する」とし、「都市・農村・鉱山の労働者大衆と先住民農民の利益と欲求は、われわれの政治闘争の中で表現され、これらの要求や原則を実現できる」、「PSPが闘うべき当面の要求は（中略）プロレタリアートと中間階級の意識的分子によって積極的に支持されねばならない」と規定し、さらに彼らが「社会主義の最終的勝利に導く道を見出す」と宣言された。このように、PSPにおいては「プロレタリア革命」との表現は用いられておらず、「社会主義革命は、資本主義によって抑圧されているすべての人民の共同行動で」とあると表現されていた。

PSPが結成される2か月前の同年7月17日から9月1日に開催されたコミンテルン第6回大会において「労農党」の結成は明確に否定されていた。この情報はベルーには届いていなかったと推定されるが、さらに国際共産主義運動においては、同年2月に開催されたコミンテルン第9回執行委員会総会において、統一戦線戦術が放棄され、「社会民主主義主要打撃」論へと路線転換を開始した。また内部的にも同年4月に開催されたソ連共産党中央委員会＝中央統制委員会合同総会や、同7月に開催された同中央委員会総会においてスターリン派とブハーリン派の闘争が開始され、6月に機関紙『プラウダ』において「右翼的変更との闘

争」開始が宣言され、1929年7月に開催されたコミンテルン執行委員会第10回総会でブハーリン派の失脚と左翼的転換が明確にされていた。これらの事実を考慮すると、PSPが左翼的展開を開始していたコミンテルンの路線と対立することになるのは確実な情勢にあった。

この路線対立は1929年6月1日～12日にブエノス・アイレスで開催された第1回ラテンアメリカ共産主義者会議において鮮明化した。コミンテルンからはウンベルト・ドロウ、南米書記局からはコドビージャ、青年共産主義インターナショナルからはペテルス（本名不詳）が、PSPからはポルトカレーロとウーゴ・ペスセが出席した。PSPはこの会議に向けて、『ペルーに関する報告』、『階級的行動の前史と発展』、『反帝国主義視座』、『ラテンアメリカにおける人種の問題』の4文書を提出した（『ペルーに関する報告』のテキストは現存していないが、残りの3文書のテキストは現存）。コミンテルン代表はこれらのPSPの報告を痛烈に批判した。批判された諸点は、(a) PSPがプロレタリア前衛党ではなく改良主義政党であるが、「共産党」に改編すべきである、(b) 先住民自決を重視すべきである、(c) 小ブルジョア層の反帝国主義姿勢の精神的要素を課大評価すべきではない、との3点に集約される。特に、(a) のPSPの労農党としての「党」の形態が最大の問題とされ、以後PSPはコミンテルンから共産党への改編を強く迫られることになる〔小倉 2002: 128-146〕。

このようなコミンテルンとPSPの対立の間で微妙な立場をとったのはクスコの共産主義グループであった。アンデス山岳南部のクスコ地方においては、19世紀末から羊毛生産が国際市場に統合されたことから大土地所有制が拡大し、その結果1910年代から20年代にかけて大土地所有者層に共有地を簞奪され、大土地所有制の農場における経済外的な労働強制を強いられた先住民農民の武装蜂起が頻発した。このような先

住民が直面した苦難を前にインディヘニスモと称される先住民擁護運動が高まり、クスコ大学を中心として青年世代の中に、雑誌『コスコ Kosko』に結集した先住民擁護と社会変革を目指す運動が形成されていた。このような青年層の急進的な運動の中から、「エル・アンデ」グループが生まれ、この「エル・アンデ」グループを核として、1928年6月8日にアブラ・クスコ支部が結成された⁵⁾。このアブラ・クスコ支部は、クスコ出身者が多くいたパリ支部およびラ・パス支部と強い関係を持っていた。その後、1929年2月1日にこのアブラ・クスコ支部からクスコ共産主義細胞が成立した。同細胞は、同年10月19日の会合で、第1回ラテンアメリカ共産主義者会議で行われたコミンテルンからのPSP批判をも踏まえ、アブラ運動との決別、PSPへの加盟拒否、共産党結党の準備を正式に決定している。

アブラ・クスコ支部の主要メンバーの大半がクスコ共産主義細胞の結成に参加したが、アブラ・クスコ支部の結成に参加したメンバーは、アブラ運動を急進的前衛世代の統一戦線的な運動と捉えて、マリアテギと同様に、アブラ運動が一国党に転換することに反対し、社会主義的傾向を強めていた。しかし、彼らはリマのマリアテギ・グループとの接点を持たず、独自にコミンテルン南米書記局と直結していた。従って、1928年後半から1929年にかけて、ペルーの大衆運動は国外にいたアヤ・デ・ラ・トーレらのアブラ中核部分、リマのPSPグループ、クスコの共産主義細胞の3つに分かれていたことになる。

しかし、リマのマリアテギらとクスコの急進的前衛世代との間には、1926年10月にマリアテギが『アマウタ』誌を創刊した時点から『コスコ』グループが『アマウタ』誌のクスコでの販売代理人になったし、1927年10月に「エル・アンデ」グループが「クントゥル」誌を発刊した時にはマリアテギが祝意を送るとともに交換契約に達するなどの関係

はあったものの、その後音信が途絶えていた。その理由は、「エル・アンデ」グループの青年たちの間に、リマ在住者に対する反発感情、マリアテギの小ブル的と見える略歴と姿勢を原因として、マリアテギやそのグループに対する不信が存在したことや、コミンテルンの動向への関心があったと思われる。

クスコ共産主義細胞は、PSPのような労農党ではなく、コミンテルンが指導するようなプロレタリア前衛党を目指すとともに、民族自決の原則から先住民自決路線（ケチュア＝アイマラ自治共和国樹立）をとってPSPとは異なる姿勢を示し、PSPとの接触は1930年初頭まで行われなかった。しかし、両者の接触が図られた時期は、既にマリアテギの病状が悪化していた時期であり、両グループの合同に関する情勢が確定する前の1930年4月16日にマリアテギが死亡した。従って、両グループの合同は同年2月にモスクワから帰国したラビネスの指導の下に、5月20日にPSPがペルー共産党（PCP）に改編された後に実現することになる。

アブラ運動は、1928年4～5月にマリアテギ・グループと決別した時点でペルー国内での拠点を失っており、強力な基盤を形成できていなかった。同年6月8日にクスコにアブラ支部が結成された時点でも、クスコ支部のメンバーのうちアヤ・デ・ラ・トーレの路線に同調していた者は少数に限られた⁶⁾。しかしながら、ペルー帰国を目指すアヤ・デ・ラ・トーレとしては、リマはマリアテギ・グループの影響が強かったために、クスコのグループとの関係を強化する必要に迫られた。その結果、1930年2月25日にバリ支部の書記長でクスコ出身のルイス・エドゥアルド・エンリケスが、アブラ支部が存在するブエノス・アイレスとラ・パスを経て、シクアニ在住の弟セサルとともにクスコに潜入し、アヤ・デ・ラ・トーレおよびバリ支部とブエノス・アイレス支部が署名した共

同提案書をクスコ共産主義グループに手交してアブラ運動の一国党結党に同調を求めた⁷⁾。しかし、エンリケスは同年4月に、共産主義細胞メンバーの協力を得られないままに、治安当局に逮捕され⁸⁾、カヤオ沖合にあるサンロレンソ島の監獄に送られ、同年8月25日にレギア政権が崩壊するまで獄中生活を余儀なくされたため、運動の拡大を図ることはできなかった。レギア政権の崩壊後、多くの人々の釈放要求によってエンリケスは釈放され、同年9月20日にアブラ・リマ支部を結成して書記長に選出された。ペルー国内のアブラ運動はエンリケスを責任者としてアヤ・デ・ラ・トーレの帰国と一国党の結党に向けて歩むことになる。

しかし、同年11月8日に統治評議会が制憲議会選挙を公示したが、その後に大統領選挙が実施されることが予想された。アヤ・デ・ラ・トーレはこの大統領選挙への立候補を目指して、一国党の組織化を急ぐこととなる。11月17日にメキシコから帰国したカルロス・マヌエル・コックス（1902～1986）は一時身柄を拘束されたが、11月26日にアブラ・ペルー支部が設立され、1931年1月にエンリケスが書記長を辞任したことを受けて（注9）、獄中のコックスが新リマ支部書記長に選出された2月から選挙活動が開始された。3月1日のコックスの釈放後、コックスを中心としてPAPの活動が開始された。そして、8月15日にはアヤ・デ・ラ・トーレが帰国して、10月11日に予定されていた大統領選挙に向けた選挙キャンペーンを本格化した。

6. ペルー・アブラ党（PAP）の思想的立場

1928年1月22日にアヤ・デ・ラ・トーレのメキシコ滞在中に作成された「メキシコ計画」は、後に「民族主義解放党」とも呼ばれる「ペルー民族主義革命党（Partido Nacionalista Revolucionario Peruano）」の

思想的立場を明記した。その前文において「勤労者諸階級（農民、労働者、中間諸階級）に代表されるペルーの人民が直面している悲惨な状況は、国内大土地所有層と外国帝国主義が人民から行っている無制限の収奪によって国の経済的混乱に起因しており、現在の政治体制は、国内のエネルギーを収奪し、国を奴隷化している帝国主義によって物質的・道徳的に支援された支配諸階級の支配の道具以外の何ものでもない」と述べた上で、第1条において、「ペルーの解放運動は、国民の経済的解放に向かう経済的自立化、そしてその結果、国民的な収奪、対外的従属、およびあらゆる分野での国民の奴隷化を代表する支配的な寡頭制によって維持されている、現在の政治的・社会的体制からの決定的な解放を追求する」とし、第2条では、「ペルーの解放革命、即ちペルー人民の経済的・政治的・社会的な解放を宣言する。この運動は、明確に宣言するように、すべてのラテンアメリカ諸国に存在する類似の諸運動の原則を含む。それら諸国においては、同様な解放の事業が実行され、できるだけ早急に、アブラの綱領によって宣言されたインドアメリカ諸国民の政治的・経済的団結の目標を達成することになろう」と、ラテンアメリカ諸国の団結という政治的目標を強調した。

そして、第3条において、「ペルー民族主義解放党」を、「ペルーの解放革命の実効的な実現のため、本計画が掲げる諸点に厳格に従う、実現されるべき唯一の組織が結成される。それが、ビクトル・ラウル・アヤ・デ・ラ・トーレを創立者および最高指導者と認め、メキシコに臨時的に本部が置かれる中央委員会によって指導されるペルー民族主義解放党である。同中央委員会に従属する、ペルーおよび米州の諸都市に公開支部や秘密支部を有する地方支部が結成される」と位置付けている[Planas 1986: 195-200]。

他方、1930年9月20日に作成された、アブラ・リマ支部の結成議事

録には、「最大限綱領」を記載した上で、「ラテンアメリカ諸国、特にペルーの政治的・経済的な将来は、征服を停止させ、禁止するための効果的な道具を創出するという歴史的必要性に従うものである。アプラは、危機に直面して種々の形態で闘ってきたすべての勢力を戦線に団結させることを求め、共通の政治的行動の綱領を有する肉体的・知的労働者の国際的な統一戦線を通じてラテンアメリカにおける反帝国主義闘争の組織となってきた」と、アプラ運動を位置付けた。

さらに「ラテンアメリカと米国との間の政治的・経済的関係の歴史がアプラを次のような結論に導いた」として、「①ラテンアメリカ諸国の支配諸階級は帝国主義の同盟者である、②これらの諸階級は、大土地所有者層、ブルジョアジー、大商人、およびそれらの諸階級の政治的ボスが帝国主義と交渉しあるいは連携する利権、借款、およびその他の取引の政策と引き換えに、ラテンアメリカ諸国の政府を手中にしている、③この階級同盟の結果として、ラテンアメリカ諸国の天然資源は抵当化され、売却されており、これら諸国の金融政策は大規模借款の継続に矮小化され、生産的な労働者諸階級は、残酷に搾取されている、④ラテンアメリカ諸国の帝国主義へ漸進的な経済的従属は、主権の喪失、米帝国主義の兵士・海兵隊員の侵略、政治的ボスたちの買収をもたらしており、ペルーはこれらを経験し、その結果に苦闘している」と述べ、「アプラは、共犯者である各国政府と協力する帝国主義の侵略に対抗する反帝国主義諸勢力のブロックに基づいて体系的かつ規律のある闘争を具体化することを意図する」と主張した〔Sanchez 1978: 196-197〕。

また帰国後、1931年8月23日にリマ市内のアチョ闘牛場で開催された集会において、アヤ・デ・ラ・トーレは、ペルー・アプラ党（PAP）の1931年大統領選挙の選挙キャンペーンにおける綱領である「最小限綱領」の要旨を発表した。その中でアヤ・デ・ラ・トーレは、（イ）ラ

テンアメリカ諸国に対する外国資本の進出を拒否するのではなく、条件付け、制限し、体系化すること、(ロ) 労働者の生命、健康、道徳的・物質的福祉、教育、解放を保証し、人間の人間に対する搾取を終焉させること、(ハ) 国際的分野においては、貿易協定を通じたラテンアメリカ諸国の間の緊密な団結、および米州の権利を防衛するための団結を追求することに向け、ラテンアメリカ権利章典の創造に向けて努力し、平和的な国境の確立と、ラテンアメリカの反帝国主義協定および仲裁裁判所の設立を目指すこと、(ニ) 金融システム、銀行制度、予算制度を改革し、工業・農業・鉱業の諸分野に支店を有するナショナル銀行を創出すること、(ホ) 大土地所有を有償接収し、大土地所有が都市部に拡大することを阻止すること、(ヘ) 非耕作地に重税を課すべく査定すること、(ト) 鉱業部門を改革し、法外な利権を見直し、原油の民族的大精製所を建設すること、(チ) あらゆる衛生条件を満たす大衆的な技術教育を策定すること」を主張した [Cossio del Pomar 1961: 343-344]。

上記の、「メキシコ計画」、アブラ・リマ支部結成議事録、および「最小限綱領」から読み取れるアブラ運動のペルー支部としてのPAPの政治的立場は、帝国主義と連携する大土地所有者層及び商業資本によって構成される寡頭支配層に対して、中間層の下に労働者・農民・中間諸階層の統一戦線である反帝国主義戦線を基盤にして、寡頭制の支配下にある政治体制の打倒を目指す運動を展開することにあつたと言える。

こうしてアブラ運動は、1928年1月から1930年9月の間に、国際共産主義運動とは決別し、プロレタリア前衛党の指導の下ではなく、中間階層の指導の下に反帝国主義闘争を闘う統一戦線党として組織化され、ペルー国内ではコミンテルンの極左路線下にあったPCPを凌駕する大衆政党に成長していった。しかし、結党当初から寡頭制支配の主軸となる大土地所有者層を主要敵としたことから、その後1950年代に右傾化

したとはいえ、大土地所有者層の利益代弁者であった軍部と1970年代まで続く長期的な対立関係に入り、海岸部北部を中心とした伝統的な支持基盤を有していたにもかかわらず、1985年に初めて政権到達するまでに半世紀以上を要することになる。

7. おわりに

本稿の冒頭に明記ように、本稿はPAPの正史においてアブラ運動の形成期に関して曖昧にされている、①アブラ運動の結成時期、②アブラ綱領の策定時期、③国際共産主義運動との決別時期の3点を明確にすることを目的とした。結果的にこれらの諸点について、①に関しては1926年10月末から同年11月2日までの間にアブラ運動は結成され、②に関しては1926年10月頃であり、③に関しては1927年2月から7月末までの間であったことを立証しえた。

ラテンアメリカにおいて1930年代以降に登場した多数のポピュリズム型の政権の先駆となったアブラ運動は、世界資本主義システムが帝国主義段階でラテンアメリカ諸国に浸透した結果、産業資本家層や新中間層が、労働者や農民とともに寡頭支配を打倒する傾向を強めた時期に発生した。ペルーにおいてアブラ運動の一部を形成する一国党として1931年に結党されたPAPは1960年代末まで寡頭支配層や同階層の利益を代弁する軍部と対立し続けた。寡頭支配が緩和され、PAPが軍部と協調するようになるのは1970年代末であり、1985年に結党後54年目にしてはじめて政権に到達してガルシア政権を発足させた。しかし、この時点でPAPはもはやポピュリズム型の政党から脱し始めていたもので、これ以降のPAPをポピュリズム政党と類別することはできない。

本稿は、このようなPAPのその後の歴史はともかくとして、1920年

代にペルーに発生した大衆運動が社会主義運動とポピュリズム型のアブラ運動（PAP）に分岐していく過程を、コミンテルンとこれら二つの大衆運動、さらにはクスコの共産主義グループの動向を踏まえて、それらの軌跡をフォローした。PAP 形成後の指導者となる多くの人々はレギア政権によって国外追放され、ヨーロッパやラテンアメリカの各地に点在していたために運動の形成が遅れ、リマのマリアテギらを中心とする社会主義運動が先んじることになったが、レギア政権の崩壊後、1931年8月15日にアヤ・デ・デ・ラ・トーレが帰国して PAP の運動が本格化すると、ペルー国内のアブラ運動は、極左路線に転換したコミンテルンの指導下に入った PCP を、影響力においてはるかに上回る規模の運動を展開することになる。

注

- (1) ムリーリョは『アブラの歴史』の中で、「1924年5月7日の出来事は象徴的な意味にとどまらず、実践的にそこにアブラを誕生させた」と述べている [Murillo 1976: 34]。また、サンチェス（1900～1994、ガルシア第一政権期の 1985～1990 年に第一副大統領）は『アブラに関する伝記のための諸点』の中で「アブラが設立された 1923 年 5 月 7 日」との表現を行っている [Sánchez 1986: 29]。
- (2) サンチェスは、この日の集会はアルゼンチンのホセ・インヘニエロスが死去したことに對する追悼集会であったと述べている [Sanchez 1978: 47]。
- (3) 『アマウタ』に掲載されたアヤ・デ・ラ・トーレのマリアテギ宛て書簡の中に記述されている以上、アヤ・デ・ラ・トーレや PAP 関係者がいかにアブラの結成時期を 1924 年 5 月に遡らせようとしても、そのような操作を行うことは不可能であると言える。
- (4) ボルトカレーロはリマのマリアテギ・グループに属する社会主義者であったが、彼がアヤ・デ・ラ・トーレやアブラを擁護する立場をとったのは、この 1928 年 3 月の時点ではアヤ・デ・ラ・トーレとマリアテギとの間の関係はまだ決裂状態にはなかったためであろう。
- (5) クスコ・アブラ支部の結成時期に関しては 2 説ある。リンチは 1927 年 2 月としているが [Lynch 1978: 31]、クアドロスは 1928 年 6 月 8 日としている [Cuadros 1990: 115]。クス

コ・アブラ支部の準機関紙となる『クントゥル』が1927年9月に創刊されているが、同誌は当初「エル・アンデ」グループの延長線上で発行されたことから、同誌の発行がアブラ・クスコ支部の結成に先だったとしても、必ずしも矛盾するものではない。「エル・アンデ」グループ、アブラ・クスコ支部、クスコ共産主義グループのいずれにも参加したグティエレスがアブラ・クスコ支部の結成が1928年6月28日であり、議事録も残存していると証言していることから [Gutiérrez 1986: 56]、筆者はクスコ・アブラ支部の結成時期は1928年6月8日であったと判断する。

- (6) クスコ・アブラ支部のメンバーの大半は、1929年2月1日に結成されたクスコ・共産主義グループの結成に参加した。彼らは主に、ロマン・サアベドラ、フリオ・グティエレス・ロアイサ、セルヒオ・カジェル・サバレタ、セサル・ビルチス・ビメンタル、アルフォンソ・ゴンサレス・ガマラ、ラファエル・トゥバヤティ・フェーロ等であり、1920年代にクスコにおいてインディヘニスモ運動である「コスコ」誌編集者・執筆者であり、後に「アンデ」グループに参加した人々である。[Gutiérrez 1986: 63]。
- (7) 同文書にはチリ支部を代表して、プエノス・アイレスに来ていたロムロ・メネセスも署名した [Planas 1986: 109]。
- (8) バリ支部に参加したロサス兄弟、ゴンサレス・ウィリス兄弟にはともにそれぞれもう一人の兄弟であるオスカル・ロサス、セサル・ゴンサレス・ウィリスがいたが、両者はともにクスコ共産主義グループの中心的人物であり、エンリケスはクスコ共産主義グループからはアブラ運動の一国党建設に向けた協力を確保することはできなかった [Planas 前掲書: 106-107]。
- (9) エンリケスは1932年にサンチェス・セロ政権によって国外追放され1946年までメキシコに亡命、同年帰国してPAPに合流したが、1948年にPAPを離党。1951年に回想録『アヤ・デ・ラ・トーレ：アメリカ最大の政治的欺瞞』を出版してアヤ・デ・ラ・トーレおよびPAPを批判する姿勢に転じた。以来、エンリケスの名はPAPの正史から削除されている [Planas 前掲書: 107]。

参考文献

小倉英敬

2002 『アンデスからの曙光：マリアテギ論集』、現代企画室

2010 「20世紀初頭ペルーにおける“ヌエボ・インディオ”観」、『人文研究』（神奈川大学人文

学会) 第 172 号、1~28 頁

Alexander, Roberto J.

1973 APRISMO: the Ideas and Dictrines of Víctor Raúl Haya de la Torre, Ohio, The Kent State University Press

Carnero Checa, Genaro

1956 El Aguila Rampante, Ediciones Seminario Peruano, México

Cossio del Pomar, Felipe

1961 Víctor Raúl: Biografía de Haya de la Torre, Lima, Ediciones Enrique Delgado Valenzuela

Cuadros, Ferdinand

1990 La Vetinente Cusqueña del Comunismo Peruano, Lima, Editorial Horizonte

Enríquez, Luis Eduardo

1951 Haya de la Torre: La Estafa política Más grande de América, Ediciones Pacifico, Lima Franco, Carlos

1979 "Mariátegui::Haya: Surgimiento de la Izquierda Nacional en *Socialismo y Participación* No.8, Lima, CEDEP

Gutiérrez Loaysa, Julio

1986 Así Nació el Cuzco Rojo, Lima, Empresa Editora Humboldt

Haya de la Torre, Víctor Raúl

1977a Obras Completas I: Por la Emancipación de América Latina, Lima, Editorial Juan Mejía Baca,

1977b Obras Completas IV: El Antiimperialismo y el APRA, Lima, Editorial Juan Mejía Baca

Heysen, Luis E.

1977 Temas y Obras del Perú: A la verdad por las Hechos, Lima, Enrique Bracamonte Vera S.A. (3ra edición)

Luna Vegas, Ricardo

1981 Mariátegui, Haya de la Torre y la Verdad Histórica, Lima, Retama Editorial

1990 Cintribución a la Verdadera Historia del APRA 1923-88, Lima, Editorial Horizonte

Lynch, Nicolás

1978 La Polémica Indigenista y los Orígenes del Comunismo en el Cusco, Lima, Pontífica Universidad Católica del Perú

Martínez de la Torre, Ricardo

- 1974 Apuntes para Una Interpretación Marxista de Historia Social del Perú I y II, Lima, Univ. Nacional de San Marcos

Mella, Julio Antonio

- 1975 ¿Qué es al ARPA?, en "Mella: Documentos y Artículos", La Habana, Partido Comunista Cubano

Murillo Garaycochea, Percy

- 1976 Historia del APRA 1919-1945, Lima, Enrique Delgado Valenzuela

Pavletich, Esteban

- 1934 El Mensaje de México, Lima

Planas, Pedro

- 1986 Los Orígenes del APRA; El Joven Haya, Lima, OKURA Editores

Ravines, Eudasio

- 1952 La Gran Estafa, Buenos Aires, Libros y Revistas S.A.

Rouillón, Guillermo

- 1975 La Creación Heroica de José Carlos Mariátegui Tomo I, Lima, Editorial Arica
1984 La Creación Heroica de José Carlos Mariátegui Tomo II, Lima, Editorial ALFA

Sánchez, Luis Alberto

- 1978 Apuntes para Una Biografía del APRA Tomo I, Lima, Mosca Azul Editores
1979a Apuntes para Una Biografía del APRA Tomo II, Lima, Mosca Azul Editores
1979b Haya de la Torre o el Político, Lima, Editora Atlántida (2da edición)
1980 Haya de la Torre y el APRA, Lima, Editorial Universo S.A., (2da edición)

Tamayo Herrera, José

- 1981 Historia Social del Cuzco Republicano, Lima, Editorial Universo (2da edición)